赤ちゃんの四季（11）　平成15年秋

わが国は“麻疹輸出国”

　今年の春はSARSの脅威にさらされましたが，幸いにも我が国ではSARSの患者の発生はありませんでした。しかし，寒さに向かうと再びSARSの患者発生がみられるのではないかという不安があります。発熱，呼吸器症状を伴うことからインフルエンザとの区別が困難です。ぜひ早い目にインフルエンザワクチンを接種して下さい。インフルエンザから身を守るとともに，SARSに罹ったのではという不安を除けることにもなります。

　近年，わが国は“麻疹輸出国”という誠に不名誉なレッテルを欧米諸国より貼られています．現在，海外で活躍することの多い十歳代後半より三十歳前半の年代のワクチンの接種率は60〜70%前後と低く，成人麻疹の発生の大半を占めています。

　0歳児の罹患率は10数%を超え，しかも，重症例が少なくありません．乳幼児の死亡は今なお毎年2桁を下りません。その原因としては，母体自身が未接種者であったり，接種していてもその子の抗体価の保有が12か月持たずに急激に降下してしまうものがかなり多いこと等が考えられています。乳幼児対策としては，麻疹発病のピークが1歳児にあることから，現行法下では1歳になったらできるだけ早期にワクチン接種を実施し，しかも，その接種率を95%以上に上げることが大切です。

　麻疹だけでなく，風疹，おたふくかぜ，水痘などの成人の発病率の上昇があります。母体の感染は胎児に重大な影響を及ぼします。

　我が国のワクチン接種体制の改善こそ，第一に取り組まなければならない課題ですが，当分の間は進んで予防接種をして，「自らの身体は、自ら守る」という考えが大切です。